

障害者のネットワーク利用の
現状を考える

チャレンジド・ ジャパン・ フォーラム

インターネットマガジン編集部・編

レポート

家から一歩も出られない人がいる。
やりたい仕事があるのにできない人がいる。
描きたい絵があるのに描けない人がいる。
そのような障害者の切実な思いを救うツールとして
現在注目されているのが、
コンピュータと、そしてネットワークだ。
今回、大阪の「プロップ・ステーション」という
パソコンネットワークを利用した障害者就労支援組織が中心となって、
「チャレンジド・ジャパン・フォーラム」というイベントを開催した。
このイベントの様様をお伝えするとともに、
現在、コンピュータネットワークが障害者にどのように利用されているのか、
またどのような問題点があるのかを探る。

Challenged

“障害者の就労”がテーマのイベント チャレンジド・ジャパン・フォーラム

7月8日に開催されたチャレンジド・フォーラム・ジャパン(主催:東京大学社会情報研究所、ブロップ・ステーション、株式会社ニューメディア)では、「チャレンジドを納税者にできる日本・実現に向けたアクション・プラン作り」をテーマに、さまざまな角度から障害者のネットワーク利用に関して熱心に議論された。

「チャレンジド」は「挑戦し続ける人」

「チャレンジド」とは、アメリカで身体障害者を示す言葉である。日本では「障害者」という言葉で括られるが、アメリカでは「挑戦し続ける人」という意味を込めて、障害者をこう呼ぶ。「チャレンジド」という言葉に対する感じ方はそれぞれ違う。障害者の中には、「別にわれわれは挑戦しているわけではない」と言う人もいる。ただ、現在の障害者の就労を取り巻く状況は厳しく、その中で、あえて仕事を通じて社会にかかわろうとする彼らの姿は、まさに「挑戦し続ける人」という言葉がぴったりだ。そして、その挑戦を実現していくツールとして、今インターネットが注目されている。

チャレンジド・ジャパン・フォーラムの概況

チャレンジド・ジャパン・フォーラムは、大阪のブロップ・ステーション(代表:竹中ナミ)という組織が主催して開催された。ブロップ・ステーションは障害者の就労を支援する組織で、いわゆるNPO(非営利組織)であり、関西地域を中心に活動している。加盟している障害者を企業に斡旋したり、何社かの協力を得て、実際にネットワークを使って就労してい

る会員が何人かいる。

このフォーラムは、今回で3回目である。実は、第1回と第2回は一般公開されていない、ブロップ・ステーションの会員向けの会合だった。今回、初めて一般公開となった。このフォーラムの特徴は、実際に障害者が出てきて自らの体験を語ることで、そして、「障害者の就労」に協力的な企業の代表者が出席して、企業の側からの意見も言うことの2点だ。今回は、ウィンドウズ95でおなじみのマイクロソフト株式会社、そしてWeb上でアニメーションが見られる「ショックウェブ」の開発元であるマクロメディア・ジャパン株式会社の2社の代表取締役がパネリストとして出席し、同社の障害者の雇用に関する考え方や、障害者が使うソフトウェアのあり方などを語った。

また、障害者を納税者にするために、行政機関がどのように動けばいいのかということも重要であるために、通産省や郵政省、自治省など行政側からも出席者を招聘している。障害者自身の立場から政策を考えるとともに、企業や行政などの意見も取り入れている点は、なかなか他のイベントでは見られない。

藤沢と大阪にも会場を設置

第1回は東京、第2回は大阪で開催

された同フォーラムだが、今回は東京大学の山上会館で開催された。ただ、より多くの人に見てもらえるように、大阪市と神奈川県藤沢市にも会場を設置して、NTTの協力を得てビデオ会議システムで映像を中継した。そのため、3会場合わせた来場者も今回は300名と前回よりも多い。このビデオ会議は同時に、パネリストの参加にも利用される。大阪や藤沢にいるパネリストが、これを利用して出席するためである。藤沢市の会場では慶応大学教授の金子郁容氏、そして大阪会場からは関西電力の絹川正明氏が参加した。

「障害者とネットワーク」について さまざまな面で考察

第1部では「21世紀に向けたテレワーク」と題して、マイクロソフトの成毛真社長やマクロメディアの手嶋雅夫氏、金子郁容氏、ブロップ・ステーションの竹中代表らで、ディスカッション



視覚障害者のために手話通訳もいた。

Japan Forum

Challenged

ンが行われた。ネットワークを利用しての在宅勤務のあり方、そして企業側として障害者をどのように見ているかということと話し合った。その中で、障害者の就労がコンピュータネットワークを使うことでスムーズになること、そして、だからこそ障害者も健常者となんら変わることなく、「一芸」を身に付ける必要があるのだという意見が成毛氏や手嶋氏から寄せられた。また、「積極的に企業を活用してほしい」という意見も成毛氏から寄せられた。

その後、成毛氏と細田和也さんによる対談（詳しくは下段参照）第2部ではブロップ・ステーションの活動

紹介および障害者の在宅就労事例（325ページ）、通産省や郵政省、自治省の人を交えて、NPOのあり方などについて討議された。障害者が単独で企業にアプローチするよりも、支援組織を活用したほうがはるかにやりやすくなる。ただ、支援組織がスムーズに障害者を支援できるようにするためにも、NPOという組織形態をもう少し社会的に認知させる必要がある。そのための法制度の改正についての意見などが述べられた。民間、行政、研究機関とさまざまな人から意見が寄せられたことにも、大きな意味があったと言える。



東京会場には約100人ほどが集まった。

障害者が使いやすい ウィンドウズを目指して

細田和也さん

マイクロソフト社と共同してウィンドウズ95のソフトウェア開発に動んでいる全盲のパソコンユーザー、細田和也さん。今回、マイクロソフト株式会社の成毛社長との対談となった。

細田さんは生後1歳半で癌のために両眼を摘出した。ただ、工作が好きでパソコンやラジオの製作に興味を持

ち、現在淑徳大学4年に籍を置きながら、マイクロソフト社に協力している。「シェアの大きいソフトが使えなければ仕事にならない」というきっかけでウィンドウズ95に挑戦するが、日本語環境による音声装置の不備に不満を感じた。そして、視覚障害者が使うためのソフトウェアが日本語版よりもはるかに整っている英語版ウィンドウズ95をインストールして使っている。マイクロソフト社に協力している細田氏だが、それは現在のウィンドウズ95に大きな不満を持っているからだ、会場では包み隠さず語る。

対する成毛社長もその批判は真撃に受け止めている。日本語版ウィンドウズ95には入力デバイス、ソフトウェアともに、全盲の人が使える環境が整っていない。それに関しては現状をとにかく認めたくえでこれから、製品を出して、それに対する意見をフィード

バックして新たな商品を開発していくしかない」と語る。

成毛社長が「少なくとも、パソコンのソフトウェアを売らせたらうちは世界一です。だからこそ、チャレンジの方にはもっとうまくプロを利用してほしい」と語ったのに対して、細田氏は「成毛さんは、ソフト業界では『マイクロソフトはプロだ』と言います。僕も、長い間全盲やってますんで、全盲にかけてはプロです。ですから、全盲にかけては、とにかく、僕を利用してくれればどうということかということを知ることができますし、それでどんどん良いものができてくれれば、それでいいということです」とやりかえす場面も見られた。細田さんがかかわることで、次のウィンドウズはどのように変わるのか。視覚障害者が使うということを真に考えた次世代ウィンドウズの登場が待たれる。



対談後に、パネリスト一同で。向かって左からブロップ・ステーション代表の竹中ナミ女史、マイクロソフト代表の成毛真氏、細田氏、マイクロソフトの技術スタッフの真中信一氏。

Japan Forum

チャレンジド・ジャパン・フォーラムで 発表された就労事例

肢体不自由で車椅子での生活をしている松田さんは、以前5年間ほど一般企業に勤めていた。会社ではコンピュータを使って仕事をしていたので、コンピュータに関連した仕事ができればと思い、プロップ・ステーションのメンバーとなった。現在は日本電信電話株式会社（NTT）から仕事を受注している。NTTの「ハローネット・ボランティア」の、ボランティアの情報ページで、ボランティアに関するページへのリンクを張っていかどうかということ、ページ作成者にメールで了解を得る作業をしている。

「通勤していたころは会社への行き

帰りにも時間がかかり、仕事をして帰ってきて寝るだけ、という生活でした。在宅勤務のほうがはるかにやりやすいですね。仕事の作業自体はほんとうにシンプルで、生活のリズムもいいですね。マイベースでやれます」と、ネットワークの有効性を語る。現在、同じ在宅就労者4人と共同して、ネットワーク上でやりとりしながら仕事の量を割り振れるので、効率もいいそうだ。

松田あきらさん



在宅就労の有効性を語る松田あきらさん（中央）。

久保利恵さん



絵本作家を夢見る久保利恵さん。

「絵本作家になるのが夢」と語る久保さん。生後6か月にウエッドニヒホフマン病が発病して以来、首から下の筋力がほとんどないという。全介護が必要で、自宅では電動車椅子を自分で操作し、屋外では手動の車椅子を押してもらって生活している。

「安定した収入を得て、経済的にも自立して、絵本作家になりたいという夢を追いかけているんですけど、副業（イラストレーター）を充実させてお仕事（絵本作家）をやりたいな、と思っています。自分は絵を書くのが得意なので、それを生かせればと思って、

マックのセミナーに2年間通いました」と語る久保さん。昨年、関西電力の45周年記念事業の広報イメージイラストを描いたのが最初で、イラストレーターとしてのデビューを果たした。最近も同じく関西電力から、イラストの発注を受けている。これはプロップ・ステーションと関西電力とのつながりがきっかけだった。障害を持ったフリーのクリエイターが大企業にアプローチするのは、かなりの困難がつきまとう。この問題をスムーズにしたのが非営利団体としてのプロップ・ステーションである。発注側である関西電力の絹川氏も、コーディネーターとしての非営利団体の地位向上を訴えていた。絵本作家としてのデビューはまだ果たしていない久保さんだが、挑戦は続く。

吉田さんはマクロメディア株式会社からの発注を受けて、ブラウザー上でアニメーションが動く「ショックウェブ」のデータを、同社の「ディレクター」というソフトウェアを使って作成している。肢体不自由で手描きのイラストを描くのもままならないという吉田さんは、コンピュータグラフィックスの有効性を強調する。

「手が震えて、線一本もまともに引けないという状況だったんです。絵を描こうと思って、どういう風に表現するかというその方法がなかった。それで、コンピュータというツールができたのありがたいと思っています。「ディレクター」を使ってアニメーションで自分のイメージを持って自分で身

に付けることができたので、感謝しています。

「マウスだと震える手でも直線が引ける」と吉田さんはコンピュータでのメリットを強調する。「自分のやりたいことをどう表現するか、自分のやりたいことをどういう風にやるかということ、マルチメディアは可能にしていくんじゃないか」と語る。

吉田さんにとって、コンピュータは人生を変えたツールであるとさえ言える。前述した久保利恵さんとともに、関西電力の仕事を行ったこともある。

吉田幾俊さん



マウスによるコンピュータグラフィックスの可能性を語る吉田幾俊さん（中央）。

フォーラムに参加した チャレンジドに聞く！ 「障害者が使うネットワーク」の 現状と問題点

前ページに登場した人たちは、今回チャレンジド・ジャパン・フォーラムにパネリストとして参加した。自ら「チャレンジド」として名乗りを上げて、成功の事例を持っている人たちだ。これに対して、一般参加の障害者はどのように考えているのだろうか。フォーラムに一般参加した方々に意見を伺った。

障害者が 発言したことが 画期的だった

お話を伺ったのは、東京都中央区に在住の阪本英樹さん。障害名は「脊髄性灰白質小児麻痺後遺症による体幹及び四肢不完全麻痺」。現在は日本IBM株式会社に勤務しており、

東京都身体障害者福祉団体連合会国際部長を務める。自家用車で川崎に通勤する傍ら、福祉にかかわるさまざまな活動をしている。今回は自ら1人の障害者として、フォーラムに参加した。

阪本さんはチャレンジド・フォーラム・ジャパンを評して「どうやって儲けにつなげるかということ、どうやって収入に

結び付けるかということを示しましたよね。それは非常に画期的でした。『障害者とネットワーク』というやはり障害を持たない人が中心となって発言するというパターンが多いんですけど、障害を持った人が実際に出てきて発言していたのが、従来の集まりとは決定的に違うと思います」と語る。

障害者の国際会議などに出席する機会が多い阪本さんは「日本の障害者をもっと発言すべきだ」と語る。以前からそのことにはがゆさを感じていた阪本さんにとって、実際に障害者が壇上に立って自らの体験を語っている姿は印象的だったようだ。

ネットワークに つながっていない人 のことも考えたい

ただ、一方で今回のフォーラムに不満を感じた面もあるという。「自分が1年間こういった活動をやってきて、最近痛感しているのは、現在、情報にアクセスしていない人は関係ないということなんです。車椅子の障害者であろうと何の障害を持つ者であろうと。本来は、情報にアクセスできない人をどうするかということももっと論ずるべきだと思う。情報のネットワークの外にいる人。フォーラムで一番関心を持ったことがそこなんです。そういう議論は一言もなかったですね。なんか、メールぐらいはできるというのが、そこにいる人たちの暗黙の前提という感じを受けました。しかし、それはフィクションの世界であって、現実の世界は接続もままならないというお金がないとか。あるいは能力がないとか。そういう人たちがいて、その人をどうするかということが一番の問題だと思います」と語る。ネットワークが障害者にとって有効なツールであればあるほど、それをまだ利用していない人への働きかけは重要であろう。

インターネットは アクセスポイントの 多さが魅力

もう1人、会場でお話を聞いた新潟県岩船郡在住の伊藤和彦さんはプロップ・ステーションの一員で、在宅勤

務の実現のために、データベースソフトウェアの講習をネットワークで受けている。在宅就労を目標としているだけあって、今回のフォーラムには大変魅力を感じたようだ。「大都市から離れた小都市に住んでいるのですが、今までは所属していたパソコン通信のアクセスポイントが近くにない、いちいち大都市まで電話をかけていました。パソコン通信と違い、インターネットなら小都市に住んでいても、地域プロバイダーを利用すればアクセスポイントが家の近くにあるという利点があります。通信料金が格段に安くなりました」と語る。

伊藤さんは、現在のネットワークの問題点は通信費の高さだと指摘したうえで、インターネットの良さを「通信費の安さ」に認めている。



伊藤和彦さん。「通信費をもう少し安くしてほしい」。



阪本英樹さん。「使っていない人いかに使ってもらおうかを考えてほしい」。

障害者のためのもう1つのイベント パソコン・ボランティア・ カンファレンス 97

チャレンジド・ジャパン・フォーラムのなかでも、「障害者とネットワーク」について考えるイベントがある。日本障害者協議会が主催する「パソコン・ボランティア・カンファレンス」である。3月15日から16日にかけて開催されたこの会議では、「パソコン・ボランティアと障害者電子ネットワークの挑戦」をテーマに、草の根で活動している障害者支援組織の講演やパネルディスカッションなどが行われた。

草の根の非営利組織 が集う場

チャレンジド・ジャパン・フォーラムは障害者のネットワークのなかでもとりわけ「就労」をテーマとした課題で展開している。これに対してパソコン・ボランティア・カンファレンス(PVC)は、障害者がネットワークを使うまでの「アプローチ」の部分も議論されているのが特徴だ。そのために、まず障害者が「パソコンを使う」ために必要な入力デバイスについての問題点まで議論された。また、チャレンジド・フォーラム・ジャパンではプロップ・ステーションという大きな非営利組織が中心となってその事例を発表していたのに対して、PVCは各地の草の根の障害者支援団体が多数集まって、事例を紹介している。

バラエティーに富んだ 併設イベント

さまざまな催しが併催されているのもこのイベントの特徴だ。ネットワーク利用に関する総合相談センターやパソコン通信紹介ブース、障害者向けの入力デバイスを紹介するアクセシビリティブース、福祉機器作りが体験できる工作ブースなど、実に多彩である。インターネットの体験コーナーもあった。

さまざまな会議が 開かれた

会場では日本筋ジストロフィー協会の矢澤健司氏、障害者就労支援組織「Cybird」の東北大学の坂爪新一氏、高齢者・障害者の立場でマルチメディアを考える会の大島真理子女史、神奈川県総合リハビリテーションセンターの伊藤英一氏が、BBSの紹介や

政策提言などをテーマに、講演を行った。また、記念シンポジウムとして横浜市総合リハビリテーションセンター企画研究室係長の島山卓朗氏、ニフティサーブ障害者フォーラムの青木与志夫氏、ピープル福祉工作クラブの関根千佳女史、ルーテル学院大学の清原慶子教授、日本障害者協会の園部英夫氏によって、「パソコン・ボランティアの挑戦」と題して、障害者の現状とネットワークの可能性について議論された。

現在では、ネットワークと障害者についてもっとも大きな団体はプロップ・ステーションだと言えるが、各地の支援団体の動きも、このようなイベントを通してこれから盛り上がっていくだろう。



者イン のター 可能 性を 広げ る ネット は障 害

チャレンジド・ジャパン・フォーラムのように、障害者のネットワーク利用をテーマとしたイベントはまだ少ないのが現状だ。今回は同フォーラムでは初めて一般公開であり、ネットワークを利用してどのように収入を得るのかということが具体的に議論された。そのうえで、大変大きな第一歩だと言える。

前ページの阪本さんのように「コンピュータをまだ使えない人にいかに使ってもらおうか」という問題に関しては、確かにほとんど触れていない。ただ、障害者が実際に壇上に立って「このような収入の方法があるのだ」という道筋を示したのは画期的であると言っ

てよい。まだ本当にネットワークを使った就労の現場という事例は少ない。だからこそ、このような事例を、イベントを通じて広めることには意味がある。

今回のフォーラムで、障害者をとりまく環境は、コンピュータネットワークで確実に変わってきたということが実感できた。ただ、障害者とネットワークとのつながりにおいて、考えなければいけないことはまだ多い。障害の種類もいろいろあるし、障害の度合いも人によってさまざま。語られるべきことは、まだまだたくさん残っている。

たとえば、今回のフォーラムではインターネットがコミュニケーションの

道具として有効かどうかという話はなかったが、家から出るのが困難な人にとって、情報を入手したり友人と語りたりするためのツールとして、インターネットは有効だろう。就労の側面もそうだが、インターネットの「いながらにして」いろいろなことができるというメリットは、障害者が社会に参加するうえで大きな武器となるに違いない。

プロップ・ステーション
問い合わせ:

TEL 06-881-0041

URL <http://www.prop.or.jp/>

(今回のフォーラムに関する情報は7月末現在掲載していないが、いずれ掲載される予定)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp